

甲斐駿河における日蓮曼荼羅授与伝説の生成

荻野 裕子

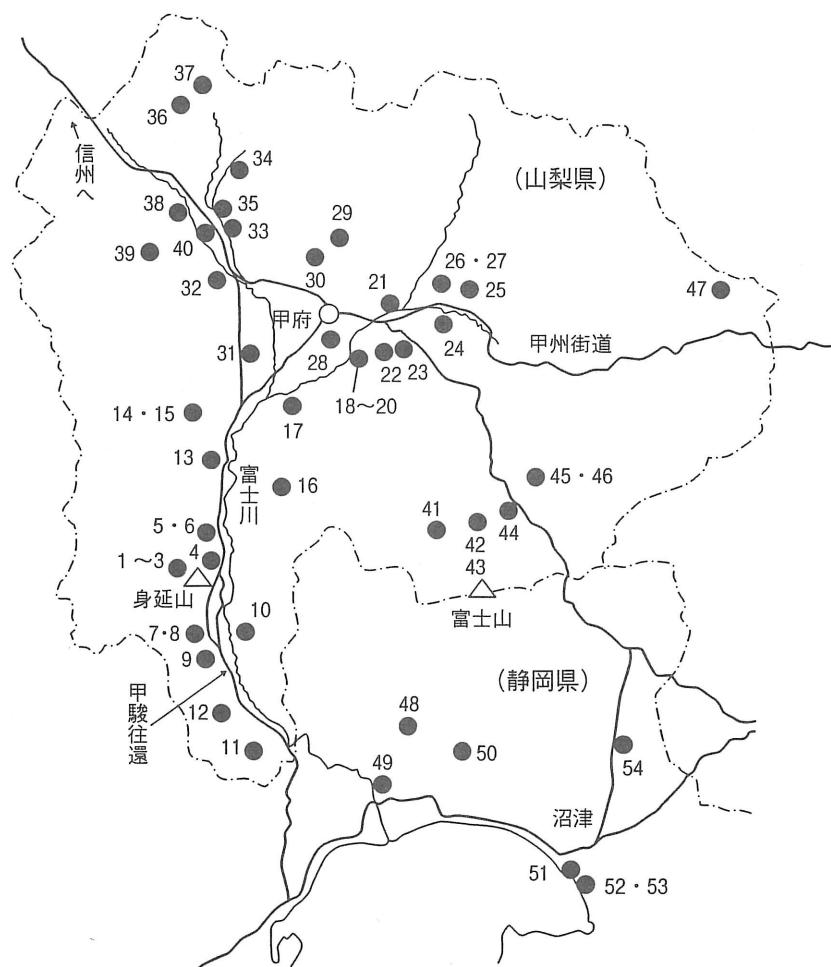
はじめに

かつての甲斐駿河には日蓮伝説が数多く見出される。日蓮が晩年に隠棲生活を送り、その遺骨を守る身延山久遠寺が甲斐駿河の国境近くに伽藍を構え、富士山麓は日蓮が身延入山下山の折に旅している。日蓮はいわすと知れた日蓮宗⁽¹⁾の宗祖であり、その厳しい他宗派への批判ゆえに数々の法難を受けた宗教者である。

このように、日蓮伝説の構造については既に考察が進められ、宗教的英雄伝説に通底する性格とともに日蓮宗ならではの特徴も強く有することが指摘されている。本稿での筆者の関心は、こうした日蓮伝説がいつごろから生成したかという点にある。史実上の日蓮は十三世紀の日本に生きた人物である（貞応元年・一二二二～弘安五年・一二八二）。しかし、伝説で語られる日蓮は、いつごろから巷間に生きるようになったのであるうか。これまで明らかにされてこなかつた日蓮伝説生成の歴史的時期と、いかなる背景のもとに伝説が生成したのか、その点に注目していきたい。

北村は、日蓮伝説には清水湧出・杖立伝説など弘法大師ら宗教的英雄伝説に共通する性格が見出されると同時に、法難を乗り越えた日蓮の強烈な靈性に期待する法難伝承がみられ、それが日蓮伝説の大きな特徴であると述べている。

このほかに宮田登の言及がある。⁽³⁾ 宮田は、日蓮が真言宗山伏を折伏する小室妙法寺縁起のように、在地における既成靈力



甲斐駿河の日蓮伝説分布

甲斐駿河における日蓮伝説

市町村名は平成 15 年 2 月末現在

伝説の概要	来訪時期	関係寺院	伝承地	出典
1 日蓮蓑着て入山	身延入山	身延山久遠寺	山梨県	B
2 身延山石割稻荷	身延入山	身延山久遠寺	南巨摩郡身延町身延山	B
3 犬塔婆	身延入山	身延山久遠寺	南巨摩郡身延町身延山	B
4 うば清水	身延入山時		南巨摩郡身延町杉山	B
5 杖立逆銀杏	身延入山時	法喜山上沢寺	南巨摩郡身延町下山	A
6 尻なし田螺 (田螺蘇生)		長栄山本国寺	南巨摩郡身延町下山	A
7 杖立樅の木峠	身延入山時		南巨摩郡身延町相又	B
8 粟冠の鷦(魚蘇生) 腰掛石	身延入山時	大石山正慶寺	南巨摩郡身延町相又	A
9 桜清水	身延入山時		南巨摩郡身延町横根	B
10 裂姿掛松			南巨摩郡身延町大島	C
11 手拭い曼荼羅 弁当石	身延入山時		南巨摩郡富沢町御堂	A
12 日蓮上人と成島	身延入山時		南巨摩郡南部町成島	D
13 手植えの年越松		深栄山善妙寺	南巨摩郡中富町切石	A
14 法論石 (小室妙法寺縁起)	身延入山時	徳栄山妙法寺	南巨摩郡増穂町小室	A
15 こきあげの竹	身延入山時	徳栄山妙法寺	南巨摩郡増穂町小室	E
16 爪書きの曼荼羅岩	身延入山時		西八代郡下部町古閑	F
17 蓮見曼荼羅 御座石	身延在住時		西八代郡三珠町大塚	A、G
18 裂姿掛松	身延下山時		東八代郡中道町上曾根	I
19 妙石庵開山由来	文永十一年と先年	妙石庵	東八代郡中道町上曾根	I
20 高座石	弘安五年	妙石庵	東八代郡中道町上曾根	A
21 鵜飼亡靈濟度 (遠妙寺縁起)	文永十一年	鵜飼山遠妙寺	東八代郡石和町四日市場	A
22 二子塚 (定林寺縁起)		恵光山定林寺	東八代郡八代町南	A
23 藤曼茶羅	文永三年など	米倉山妙昌寺	東八代郡御坂町金川原	H
24 日蓮来訪の経塚	文応年間	妙法山蓮花寺	東山梨郡勝沼町下岩崎	甲斐国志
25 日蓮来訪による開山 由来	文永六年	長遠山上行寺	東山梨郡勝沼町小佐手	甲斐国志
26 高座石	文永三年	休息山立正寺	東山梨郡勝沼町休息	A
27 高座石		子安山本立寺	東山梨郡勝沼町休息	甲斐国志
28 七重宝塔曼荼羅	身延入山時	宝塔山遠光寺	甲府市伊勢	甲斐国志
29 杖立逆竹	御獄参詣		甲府市高町	A
30 一宿の靈場、改宗	御岳参詣	順徳山常說寺	中巨摩郡敷島町吉沢	甲斐国志
31 上人塚と開かずの門		法善寺 (非日蓮宗)	中巨摩郡若草町加賀美	J
32 藤曼茶羅	佐渡への途次	法永山本照寺	韮崎市竜岡下条東割	K
33 ヒルの口封じ			北巨摩郡須玉町大豆生田	L
34 杖立桜 (遠照寺開山由来)		定栄山遠照寺	北巨摩郡須玉町穴平	A
35 讀経の旧地	弘長年間	久栄山妙円寺	北巨摩郡須玉町若御子	甲斐国志
36 高座石	八ヶ岳登山の帰途		北巨摩郡大泉村	A
37 休息の靈場 腰掛石 山号授与	佐渡からの帰途	来仏山上行寺	北巨摩郡大泉村西井出	甲斐国志
38 高座石	佐渡からの帰途	石光山見法寺	北巨摩郡長坂町日野	甲斐国志

39 高座石 枝立薦木	佐渡からの帰途	敬寛院	北巨摩郡白州町 (旧鳳来村)	A
40 神代桜		実相寺	北巨摩郡武川村山高	K
41 西湖の腹赤 榎曼荼羅		靈鷲山常在寺	南都留郡足和田村西湖	A
42 二十八紙曼荼羅	富士登山後	蓮華山妙法寺	南都留郡河口湖町小立	M
43 妙法寺僧との法論		蓮華山妙法寺	南都留郡河口湖町	N
44 富士登山の経ヶ岳	文永六年	吉祥山上行寺	富士吉田市上吉田	O
45 榎曼荼羅	身延入山又は下山	靈鷲山常在寺	富士吉田市上暮地	本文註(28)
46 鍋蓋の日蓮			富士吉田市上暮地	
47 山号授与 改宗	文永十一年	安国山立正寺	北都留郡上野原町西原	甲斐国志
			静岡県	
48 乳銀杏	身延入山時	鶯目山本光寺	富士宮市黒田	P
49 経典閲覧 高座石	(立正安國論前)	岩本山実相寺	富士市岩本	Q
50 雨乞い曼陀羅	富士山修行	妙富山法藏寺	富士市神戸	本文註(15)
51 津波除八日祈祷 (妙海寺縁起)	実相寺への途次	龍王山妙海寺	沼津市上香貫	
52 津波除曼陀羅松			沼津市我入道	P
53 我入道地名由来	伊豆流罪時	沼津市塩満		R
54 車返しの靈場	身延入山時	裾野市上原		X

出典

- A 土橋里木『甲斐伝説集』山梨民俗の会 1953
- B 身延町誌編集委員会編『身延町誌』身延町役場 1970
- C 山梨県南巨摩郡身延町編『ふるさと身延 第2集』 1983
- D 南部町誌編纂委員会編『改訂 南部町誌 下巻』 南部町 1999
- E 増穂町誌編集委員会編『増穂町誌 下巻』 増穂町役場 1976
- F 下部町誌編纂委員会編『下部町誌』下部町役場 1981
- G 三珠町誌編纂委員会編『三珠町誌』三珠町役場 1980
- H 御坂町教育委員会編『ふるさとの民話』1975
- I 中道町史編纂委員会編『中道町史 上巻』 中道町役場 1975
- J 若草町誌編纂委員会編『若草町誌』若草町 1990
- K 北巨摩郡教育会編発行『口碑伝説集』1935
- L 田富町誌編纂委員会編『田富町誌』田富町役場 1981
- M 伊藤堅吉編著『河口湖周辺の伝説と民俗』緑星社出版部 1980
- N 富士吉田市郷土館編『富士吉田の昔話・伝説・世間話』富士吉田市 1985
- O 富士吉田市史編さん委員会編『富士吉田市史 民俗編第二巻』富士吉田市 1996
- P 静岡県女子師範学校郷土研究会編『静岡県伝説昔話集 上巻(復刻)』羽衣出版 1994
- Q 鈴木富男編『富士市の伝説と昔話』文華堂 1978
- R 沼津市教育委員会社会教育課編『沼津市史編さん調査報告書第九集 塩満の民俗』沼津市教育委員会 1996
- X 裾野市史編さん専門委員会編『裾野市史 第七巻 資料編民俗』裾野市 1997

一、甲斐駿河の日蓮伝説・分布と傾向

甲斐駿河における日蓮伝説の分布は、管見が及んだ範囲で図の通りである。分布図からは、身延山久遠寺を中心に南巨摩郡方面に伝説が多いことがうかがわれる。この地域は圧倒的に日蓮宗寺院が多く、身延町では町内寺院の約九十%が日蓮宗であり、宗教的に日蓮宗の優勢地帯といえる。山間部が多い山梨県西部にあって、富士川の河川交通とその沿岸を通る甲駿往還は交通の中心であり家々も集住し、伝承地の多くもその付近にある。身延山もほぼ富士川沿いにあり、その参詣には富士川の舟運と、身延道とも呼ばれた甲駿往還がよく利用されていた。

富士川の支流である笛吹き川沿いに甲州街道へと続く東八代郡方面にも、著名な鵜飼山遠妙寺の鵜飼亡靈済度をはじめ数々の日蓮伝説が見出される。日蓮宗寺院の割合は、藤晏荼羅や二子塚の伝説がある八代町では三十五%、鵜飼山がある石和町では二十四%と三割前後を占めている。

山梨県北西部にかけて、甲駿往還から分岐して信州へ向かう駿信往還・甲州街道付近にも日蓮伝説が散見される。駿信往還が通る中巨摩郡では日蓮宗寺院が三十七%を占めるものの北巨摩郡では十六%と寺院数が減少する。しかしながら北巨摩郡で日蓮伝説は八例が数えられ、日蓮来訪が身延山との関係ではなく「佐渡（流罪）からの帰途」などと語られるのもこの地域の

特色である。

一方で、富士山麓を囲むようにした日蓮伝説の分布にも気づかれる。富士山南麓の伝承地も東海道等の街道にほぼ沿った位置にあり、同時に富士宮市では日蓮宗寺院が約七十七%、富士市では四十五%を占めるなど日蓮宗の優勢地帯である。一方で富士山北麓の富士吉田市では日蓮宗寺院はわずか一ヶ寺などむしろ劣性地帯なのだが、そこにも日蓮伝説が見られるのは、実際の日蓮の足跡と重なることが要因として考えられる。

日蓮は佐渡流罪の後、身延山へ隠棲する。文永十一年（一二七四）に富士山南麓を旅して身延山に入山し、九年後の弘安五年に病氣療養のため下山する際には富士山北麓を旅している（その後現在の池上本門寺の地で死去）。例えば南麓では乳銀杏の伝説があり、北麓では檀曼荼羅の伝説があり、両地とともに日蓮の来訪は身延入山あるいは下山の折であることが語られている。

これらの地域を離れ山梨県北東部方面になると日蓮宗寺院もほんんどなく、同時に日蓮伝説もほんんど見出せない。このような伝説の分布状況からは、伝説の背景に基本的に日蓮宗の教勢があること、そして街道を通じての伝説の伝播と往来する人々への喧伝が考えられるだろう。幕末に日蓮宗信者が記した『松亭身延紀行^④』では、江戸から甲州街道を通つて休息山立正寺・鵜飼山遠妙寺へ、そして甲駿往還に入り小室山妙法寺・身延山久遠寺へ、その後舟運で富士川を下り駿河の岩本山実相寺へ参

詣している。すべて日蓮來訪が語られた寺院である。高僧にはしばしば聖蹟巡礼の地が整えられ、日蓮の場合も以上のような靈蹟巡拜は江戸時代から顯著になつたといふ。⁽⁵⁾この地域での靈蹟巡拜としては、詳細は不明だが、江戸時代後期の日蓮宗題目塔に「一千ヶ寺詣成就」の碑文が度々散見された。靈蹟には伝説が関わるものと思われ、この点は今後の課題である。

さて伝説の内容を概観すると、甲斐駿河は日蓮が法難を経験した地ではなくそのため法難伝承は見出せないが、既成靈力への優越性を示す伝説はしばしば見られる。それと同時に、旅する宗教者の姿で杖立桜の奇蹟を起こすなど宗教的英雄伝説に通底する性格がみられ、既に指摘された通りの日蓮伝説の構造がうかがわれる。付け加えるならば、この地域の日蓮伝説は、日蓮の來訪が明確な歴史時期に結びつけられる傾向が強いようである。特に日蓮の來訪が身延入山時のことと語る伝説は十九例と数多い（入山の文永十一年含む）。これは日蓮の身延隱棲という事実の反映であろうが、そうした日蓮の生涯についての知識を有する者が、伝説の生成に関わっていたことが予想される。また寺院に関わる伝説が多い。開山由緒との関連や寺院内に記念物があるような状況は、ムラの樹木や石が記念物とされる場合に比べて伝説が自由には語られにくく、伝説が寺院によつて管理されてきたことを示唆していよう。日蓮の生涯についての知識を有する者は、恐らくこのような寺院の宗教者と考えられ、日蓮宗地帯に日蓮伝説が多いことがその表れと考えられる。

二、日蓮伝記と日蓮伝説

さて、日蓮の伝記は室町時代末期成立とされる『日蓮聖人註画讚』及び文明十年（一四七八）成立の『元祖化導記』をもつてその一代記的体裁が整えられたとみられている。⁶⁾その後、現在に至るまで数々の日蓮伝記が作成されているが、その中にこれら日の日蓮來訪はどのように記されているのだろうか。結論からいえば、十七世紀までに成立した主要な日蓮伝記には、身延入山下山を除き（その際に伝説的な内容は伴わない）甲斐駿河における日蓮來訪の記述はみあたらなかつた。史実上の日蓮は各地を巡ることなく身延山に入り、また隠棲期間中はほぼ身延山から出ることはなかつたといふ。

しかし、十七世紀末・日蓮四百遠忌の延宝九年（一六八二）に出版された『日蓮大聖人御伝記』（筑波大学付属図書館所蔵）では、後述する二十八紙曼荼羅と謡曲「鵜飼」の題材にもなつた甲斐石和の伝説が見出されるようになる。さらに、四百五十遠忌の享保十六年（一七三一）成立の『本化別頭仏祖統記』（以下仏祖統記と略す）、五百遠忌の天明元年（一七八一）出版の『本化高祖年譜』⁽⁹⁾になると、文永六年の甲斐遊化伝説や身延入山時の甲斐廻国伝説が数々記されるのである。

こうした新たに伝記に加味された内容が、各地で語られる伝説を取り上げた可能性は考えられる。『日蓮大聖人御伝記』は

著者不明だが、『仏祖統記』の場合、編者である仙台の僧日潮は「数年之搜索纂修」と年譜にあり、『本化高祖年譜』の序には、著者である水戸の僧二名が日蓮の息懃の所を歩き、古刹に旧記を探り、古老に遺聞を尋ねたことを記し、在地の資料や伝承を用いたことがうかがわれる。両書での伝説内容はほぼ共通することから、『仏祖統記』が成立した十八世紀前半には、すでに甲斐駿河において数々の日蓮伝説が語られる状態にあり、それが伝記に加味されたことが推察される。その後幕末に刊行された在家信者による日蓮伝記^[10]を閲覧すると、日蓮の潤色が進むと同時に甲斐駿河の日蓮伝説はかなり伝記の中に定着している。

以上の日蓮伝記は日蓮宗関係者による記述になるが、文化十一年（一八一四）^[11]に甲府勤番の幕吏・松平定能によつて成立した地誌『甲斐国志』や文政三年（一八二〇）^[12]に東海道島田宿の文人桑原藤泰によつて編纂された地誌『駿河記』にも日蓮伝説は詳しく述べられている。『甲斐国志』では日蓮伝記からの引用も多いが、編纂時に「寺社縁起」や「古く申シ伝へ候嘶」も調べるよう村々に触れているとおり、各寺の記録や在地の伝承を採録したと見られる部分が多い。桑原自身が調査に歩いた『駿河記』でも、「伝云」「寺伝に云」と在地伝承を取り上げたことがうかがわれる。十九世紀初頭には、伝記を作成するような一部の宗教者達や宗派内にとどまらず、各地で日蓮伝説が語られ、在地で知られるようになつてゐたと考えられる。

以上のように、甲斐駿河の場合に限つていえば、記述される

日蓮の姿は、十八世紀を迎えるころに在地伝承の影響も受けて大きく様変わりしたことがあがわるのである。

では、そうした十八世紀前半に既に成立していたとみられる在地伝承を担つたのは誰なのか。これらの伝承が伝記に組み込まれている点からも、前節で指摘したとおりその伝説生成に日蓮宗宗教者が関与したことは想像に難くない。

伝説が生成したと考えられるのとちょうど同じ頃、十七世紀後半から十八世紀は、甲斐において日蓮宗寺院が増加した時期であることが明らかにされている。^[13]寛永九〇十年（一六三二～三）作成の諸宗末寺帳に記載された甲斐の日蓮宗寺院は合計二百八ヶ寺、文化十一年（一八一四）編『甲斐国志』に記載されたのは四百一ヶ寺と、この期間に日蓮宗寺院はほぼ倍増しているのである。増加した寺院やそれらに教化を行つたであろう古くからの日蓮宗寺院の活動などが考えられ、ともかくもこうした日蓮宗勢力の拡大に伴つて、この時代に多くの日蓮伝説が生成した可能性は考えられるだろう。

三、日蓮曼荼羅授与伝説

本稿では、こうした日蓮伝説の中から、日蓮が来訪して一般の家や人に曼荼羅を授けたという伝説を対象に、その生成の様相を探つてみたい。このような型の伝説を、本稿では日蓮曼荼羅授与伝説と称しておく。日蓮宗における曼荼羅は「南無妙法

蓮華經」の題目を記した文字曼荼羅であり、これを本尊とする寺院も多いなど重要な信仰対象である。親鸞伝説にも南無阿弥陀仏の六字名号を書いて授けたという同様な伝説は見られ、日蓮だけに特徴的なものではないが、語られるのが南無妙法蓮華經である以上、その主人公が日蓮であることが動かし難い伝説である。と同時に、のちに曼荼羅を寺院に預けるという内容が八例中六例に見られ、曼荼羅を介在に特定の日蓮宗寺院と伝承者が具体的に接点を持つていているのである。

なお、六例の日蓮宗寺院のうち身延山の末寺だったのは、③の妙昌寺、⑧の法藏寺であり、現在狭義の日蓮宗である。④の本照寺は北山本門寺の末寺だったが現在は狭義の日蓮宗、⑥の妙法寺、⑤⑦の常在寺は静岡県沼津市岡宮の光長寺末寺であり、現在法華宗本門流である。これらの宗派門流は変動しながらも日蓮の死後早い段階で分派しているため、伝説の生成期にも異なつていたと考えられる。このためこれらの伝説は、特に限られた門流内で生成したのではなく日蓮伝説に一般的なものと思われる。

①【事例11】南巨摩郡富沢町福士・御堂地区 手拭い曼荼羅

日蓮身延入山時、休息の礼にその家の老婆の手拭いに曼荼羅を書いて授ける。曼荼羅は現存しないが、休息の折弁当を食べた場所という弁当石がのこる。

②【事例17】西八代郡三珠町大塚 蓮見曼荼羅

日蓮が大塚沼の蓮を見に来訪、雨で休息した家に曼荼羅を授ける。曼荼羅は現存せず。

③【事例23】東八代郡御坂町金川原 藤曼荼羅

日蓮身延在住時あるいは下山時、休息の礼に藤を筆として曼荼羅を書いて授ける。のちその家に不幸が続き曼荼羅は八代町米倉の妙昌寺へ預けられる。開帳行事なし。

④【事例32】韋崎市竜岡・下条東割地区 藤曼荼羅

日蓮佐渡流罪の途次休息し、萩の餅を捧げた老婆への礼に藤を筆として曼荼羅を書いて授ける。藤曼荼羅は本照寺で所蔵し、毎年開帳行事。

⑤【事例41】南都留郡足和田村西湖 檻曼荼羅

日蓮に魚入りの粥を出した老婆を、檻に曼荼羅をかけて清度。檻曼荼羅は河口湖町小立の常在寺へ納められる。曼荼羅は現存せず。

⑥【事例42】南都留郡河口湖町小立二十八紙曼荼羅

日蓮富士登山後、小立二十八人の求めに応じ柳を筆として曼荼羅を書いて授ける。のち曼荼羅は小立・妙法寺を経て静岡県沼津市岡宮の光長寺所蔵。毎年開帳行事。

⑦【事例45】富士吉田市上暮地・居里地区 檻曼荼羅

日蓮身延入山あるいは下山時、一宿した家の檻に曼荼羅をかける。のち個人所蔵はよくないと曼荼羅は河口湖町小立の常在寺へ預けられる。現在は開帳行事なし。

⑧【事例50】富士市神戸・曼陀羅地区 雨乞い曼荼羅

日蓮富士登山後（または身延入山時）、世話の札に雨乞いの呪物として曼荼羅を受け、雨が降る。のちその家に不幸が続き曼荼羅は同市三ツ歳・法藏寺へ。毎年開帳行事。

このうち、筆者は以前に⑧富士山南麓の曼陀羅地区に伝わる日蓮曼荼羅授与伝説について調査を行つた。¹⁵⁾その結果、伝説が地名の由来であるものの曼陀羅地区は江戸時代の新田村であり、伝説は十八世紀後期の日蓮五百遠忌の頃に、現在曼荼羅を保管する日蓮宗寺院の僧侶によつて生成された可能性が高いと考えられた。曼荼羅地区に寺院はなく全戸が浄土真宗の檀家だが、祖師（日蓮）堂があり、毎月題目講を行い、年に一度曼荼羅を開帳するなど、その信仰はほとんど日蓮宗である。このような状況から、伝説の生成は日蓮宗寺院による新田村への教化活動に伴うものであったと推察した。

本論ではかなり広範域で知られている、⑤の河口湖町小立の日蓮曼荼羅授与伝説を中心に取り上げる。

四、河口湖町小立・二十八紙曼荼羅伝説

河口湖は富士山北麓に点在する富士五湖のひとつであり、河口湖町小立地区は河口湖畔の南東側に位置している。富士山北麓の山裾を背後に、河口湖周辺の平地に民家は集中し、湖畔の高台に法華宗本門流の蓮華山妙法寺がある。小立に存在する寺

院はこのほかに勝山村境に位置する同じ宗派門流の靈鷲山常在寺があり、小立地区の住民はほどどちらかの檀家になつてゐる。妙法寺の開山は事例に掲げた日蓮の曼荼羅授与伝説にちなむとされている。妙法寺の「由緒明細帳」（慶應四年・一八六八）によれば、日蓮に曼荼羅を求めた二十八人のうち一人が寺の開基となつたとされ、その子孫という二軒は現在妙法寺の檀頭をつとめている。また、二十八人の筆頭とされ、曼荼羅を授与されたというトウベエサマの家も存続して檀頭をつとめている。寺院運営の中心となる小立の檀頭四軒（世襲制。檀家總代より上位）の内三軒がこの伝説と関わりを持ち、そのことは口承でも周囲に認められているのである。

小立における日蓮曼荼羅授与伝説を、トウベエサマの分家である渡辺丁氏（昭和二年生まれ）に尋ねると次のようである。

「日蓮が富士山へ登つた時か、日蓮の弁当とかトウベエサマのうちがよく面倒見たので曼荼羅を書こうとしてくれた。渡辺イッケシュー（トウベエサマの同族集団）とかの二十八人が来てオマンダラを書いてくれと頼んだが、（日蓮が）それぞれ書くのは面倒なので、二十八枚をまとめて（一枚にして）書いた。ヤナムネ（地名）からとつた柳の枝を潰して筆にして、石の上でオマンダラを書いた。オマンダラがありがたくて、そばの石が鼻をたれたので鼻曲がり石という。

それから身延でこのオマンダラがほしくて僧兵をよこしたりした。トウベエサマがオマンダラを守るために光長寺に預

けたという。」

この伝承内容は話者がトウベエサマの分家に生まれている

もに、授与された「優婆塞 藤太夫日長」の名が記されている。^[17]

この「藤太夫」がトウベエサマであるとされている。

ため、非常に詳しく整った形になつてゐる。話者によつては「二十八人」や「身延が僧兵をよこした」といつた部分は欠落するが、日蓮來訪による曼荼羅の授与を基本に、トウベエサマ、鼻曲がり石のモチーフが欠落することはほとんどない。特に鼻曲がり石は必ず登場する。

鼻曲がり石は小立地区の集落のはずれ・富士山の溶岩流末端部にあり、その溶岩がちょうど鼻が曲がつたような形にできあがつた奇岩である。誰の目にも映る大きな奇岩は、伝説の記念物として格好な役割を果たしているといえる。

一方伝説の中心である二十八紙曼荼羅は、語られてゐるとおり現在は同宗派門流の本山・沼津市岡宮の光長寺に所蔵されている。光長寺では毎年七月二十五日に、妙法寺住職・トウベエサマの当主・渡辺イツケシユニー一名の参列のもとに虫干し開帳を行い、トウベエサマがいなければこの開帳は行われないとわれている。開帳行事や妙法寺の檀頭制度に見られるように、日蓮の曼荼羅授与伝説は現代にも大きな影響力を働かせているのである。

二十八紙曼荼羅は、事例として掲げた日蓮曼荼羅授与伝説の中で唯一日蓮真筆と認められている。その料紙は実際に二十八枚の紙が繋がれ、日蓮真筆の曼荼羅では最大である。曼荼羅の左下隅には、「弘安元年太歲戌寅十一月廿一日」の年月日とと

この「藤太夫」がトウベエサマであるとされている。

このように日蓮が二十八紙曼荼羅を藤太夫に授けたことは紛れもない史実であり、弘安元年も身延山在住期間である。しかし、このころに日蓮が各地を訪れた可能性はまず考えられない。では日蓮來訪による曼荼羅授与の伝説は、いつごろ生成されたのであらうか。

文正元年（一四六六）から永禄四年（一五六一）までの富士山北麓の様相を記載した『妙法寺記』では、天文二十一年（一五五二）の御本寺による「御本尊懸け申候」^[18]を二十八紙曼荼羅の北麓における開帳と解釈することはできるが、「御本尊」にまつわる日蓮來訪などの由来は記述されていない。

一方光長寺側では、文禄二年（一五九三）以後慶長八年（一六〇三）以前の作成という『当家諸門流繼図之事』^[19]のなかの「岡宮ノ光長寺繼図之事」部分に、二十八紙曼荼羅を見出すことができる。

「二十八枚続ノ大漫荼羅之事、二十八人ノ檀那衆一枚宛白紙ヲ持參シ奉リ御本尊ヲ所望申ス、而ニ大聖人ノ仰セニ只一軸ニ有テ可レ然、即二十八枚ヲ一幅ニ御書ス也、折節夫ニ大石アリ中窪メリヤラン書キ得ズト被レ仰ケレバ、即チ石平ニナレリト云」

以上からは小立における伝説に非常に近い内容がうかがわれ、早ければ十六世紀末には日蓮の二十八紙曼荼羅授与伝説の

型がほぼ整つていたことがうかがわれる。しかしこの史料では、小立での伝説において重要なモチーフである鼻曲がり石とはまるで異なった、窪んだ石が平らになつたという奇蹟譚が記されている。「岡宮ノ光長寺繼図之事」であるから、「二十八人檀那衆」は光長寺の檀那衆とも考えられ、そこで奇蹟を伴う平らな石として想起されるのが曼荼羅石である。曼荼羅石

は、二十八紙曼荼羅が納められた光長寺御宝蔵の手前にある、幅一メートル程の平らな石である。その名前とかつて石を持ち出した者が不幸になつたという逸話が伝えられ、⁽²⁰⁾ 靈性が認められた石であることがうかがえる。「二十八枚続ノ大漫荼羅之事」での石のモチーフを重視すると、伝説は当初岡宮で生成された可能性も考えられる。

その後、約百年を経た四百遠忌成立の『日蓮大聖人御伝記』には、光長寺所蔵の曼荼羅が甲州郡内に由来する記述が初めて見出される。日蓮は身延への道すがら、(本書では「二十八でなく)十八人の求めに応じ十八紙を継いだ曼荼羅を受けたという。光長寺・妙法寺とともに近世を遡る縁起類は確認できないが、推定近世後期作成の「光長寺由緒記」(同寺所蔵)には、曼荼羅が甲州での日蓮來訪に由来することが記されている。

四百五十遠忌(一七三一)成立の『仏祖統記』になると、二十八人のモチーフとともに、日蓮の來訪が次のように記される。

「宿小立村書大曼荼羅此地後為寺呼妙法寺ト此曼荼

羅今藏駿州岡宮光長寺伝云於小立求曼荼羅者謂レ之ヲ〔⁽²¹⁾〕〔伝云〕以下は割注)

本書では、日蓮が曼荼羅を甲州のなかでも小立で書いたこと、妙法寺開山がそれに由来することが明確にされるのである。

『仏祖統記』成立の少し前(正徳二年(一七一))に光長寺が小立の藤太夫子孫に宛てた文書には、しばらく中断していた大曼荼羅の入御(小立での開帳を指すようである)を再開すると記されている。文書の宛名は「藤太夫子孫 藤兵衛」。小立で曼荼羅を授与されたと語られるのは藤太夫でなく「トウベエサマ」である。トウベエサマがこの時の「藤兵衛」ならば、この時期に伝説のモチーフがもうひとつ捕つたことにならう。

伝記には登場しないが、小立では日蓮の來訪を語る上で鼻曲がり石が中心的な存在であり、欠かせないモチーフである。鼻曲がり石の周辺は「鼻曲がり」という地名もあり、その形状と名称からして「石平」とはいえず、「光長寺繼図之事」とは明らかに伝説が変化していることがわかる。ではいつごろから石のモチーフは鼻曲がり石になるのか。

鼻曲がり石の手前には、鼻曲がり石に日蓮が來訪して曼荼羅を書いたことを顕彰する石造物が妙法寺により建立されている(建立年代はないが江戸時代中後期か)。「南無妙法蓮華經 日蓮大菩薩 蓮華山妙法寺」を中心、「元祖大菩薩 弘安年中於此石上」「廿八紙大御本尊御出〔靈場也〕」(元祖大菩薩は日蓮、

弘安年中は同五年まで身延在住期間、本尊は曼荼羅を指す)。

鼻曲がり石は、文化十一年(一八一四)編纂の『甲斐国志』⁽²³⁾には「鼻ヅラ石」として紹介されている。場所と「象ノ鼻ニ似タル」形状が記されていることから、この時代に日蓮來訪地とされたのは小立の鼻曲がり石に間違いない。地誌に取り上げたからは、記述当時既に周辺で知られたものになっていたのだ

ろう。本書では「弘安元年十一月十一日僧日蓮此ノ石上ニ坐シ廿八枚ノ曼荼羅を書シテ藤太夫日長ニ与フト云フ」と、既述した石造物と同様の伝承に加え、年月日と藤太夫の名を採集している。これは二十八紙曼荼羅を知らなければ得られない情報であり、妙法寺が情報提供したのである。同書では妙法寺の項目でも「寺記ニ云フ」として寺の記録から同様な伝承を紹介している。

妙法寺では、文政四年(一八二二)にその参道に、「宗祖大菩薩転法輪遺跡 図書廿八紙大本尊靈窟」と刻んだ、高さ二メートルにも及ぶ題目塔を建立している。妙法寺が靈場や靈蹟よりも「靈窟」の言葉を用いたのは、鼻曲がり石を暗示したのではなくかろうか。その後幕末になつて、妙法寺は日蓮結縁地であるという寺格を主張したことにより、伏見御所の祈願所にもなっている。⁽²⁴⁾

このように「光長寺継図之事」から約二百年後の十九世紀初頭にもなれば、鼻曲がり石を通じて、小立に日蓮が來訪し二十八紙曼荼羅が書かれたことが、妙法寺によって盛んに喧伝

されるのである。小立では鼻曲がり石のほかに、曼荼羅を書く筆にしたという柳がのこりその脇にはオソツサマ(祖師)日蓮像)がまつられている。鼻曲がり石の手前には、日蓮がこの地で初めて説法したという高座石を囲む法華堂があつて妙法寺の奥の院に位置づけられるなど、妙法寺周辺には伝説の記念物が配置されているのである。

既述したとおり、甲斐での日蓮宗勢力は十七～八世紀に増大するが、その内訳はほとんどが身延山末寺の増加であり、身延山が幕藩体制の中で勢力を拡大し、現在日蓮宗總本山とされるような地位を確立していく時期である。勝劣派の光長寺は一致派の身延山と基本的に対立関係にあり、伝説でも「身延が僧兵をよこした」と両者の争いが語られている。

勝劣派の光長寺は戦国末期には一時勢力を衰退したとされ、寛永十年(一六三三)『諸宗末寺帳』には、末寺ではないが身延山が差し出した「法花宗諸寺目録」⁽²⁵⁾の中に記された存在である。しかし、天明六年(一七八六)には「法華宗勝劣派光長寺派寺院本末帳」を記して本寺としての立場を明確にし、妙法寺・常在寺を末寺に明記するなど、十七世紀中期から十八世紀後半に教勢を復興させているのである。これはちょうど小立における二十八紙曼荼羅伝説が生成したとみられる時期に相当する。富士山北麓には光長寺の末寺だった寺が多く、甲斐において教勢をのばす身延派に対抗する光長寺派の動きの中で、鼻曲がり石のモチーフを中心とした日蓮小立來訪を語る伝説が、光長寺及

び妙法寺によつて生成されたのではないだろうか。この地に日蓮が来訪したという歴史が、これら寺院にとつて必要だつたと思われる。

日蓮曼荼羅授与伝説には曼荼羅を書く筆が柳や藤であり、掛ける場所が榎や松であるなど、伝承者にとつて身近な接点がある。小立だけでなく伝承地では、日頃にできないか現存しない曼荼羅よりも、こうした柳や松が伝承の重要な媒介物となつてゐる様子がうかがえた。ある宗派の宗教者による作為的な伝説であつても、根底で伝承者の民俗的な心意にかなつたことが伝承されてきた要因と思われる。小立ではそうした柳や石がいはずれも妙法寺の所有地であり、妙法寺によつて伝説を伝承する環境が整えられてきたと考えられる。⁽²⁷⁾

同じ小立に所在する光長寺派の常在寺も、西湖の榎曼荼羅・上暮地の榎曼荼羅の二例の日蓮曼荼羅授与伝説に登場する。事例45の上暮地は日蓮が身延入山又は下山の折に通つた場所と語られ、数々の日蓮伝記に「吳地遠山」（吳地＝暮地）と伝説で曼荼羅を受けられる遠山家（屋号オマンダラ）も記されている。にもかかわらず、それにつわる榎曼荼羅の伝説は全く記されず、『甲斐国志』などにも出てこない。十九世紀初頭になつても、榎曼荼羅伝説は生成あるいは周知されていなかつたと考えられる。その後天保十一年（一八四〇）になつて遠山家に「日蓮大士御一宿之靈場地」と刻んだ題目塔が常在寺によつて建てられる。現在日蓮夜の十月十二日には常在寺住職が遠山家のお

堂で御会式を行い、その折に暮地への日蓮来訪などの由来が語られるという。このような状況から、榎曼荼羅伝説は常在寺によつて十九世紀以後に生成されたのではないかと考えられる。上暮地で常在寺の檀家は遠山家を含めて三軒に過ぎないといふことからみて、この伝説生成も常在寺の教勢拡大に伴うものではなかつたか。常在寺のこののような動きは、富士山北麓における光長寺派の教勢復興の流れに沿つたものであり、二十八紙曼荼羅伝説における妙法寺の動きと同様なものではなかつたか。

以上に掲げた甲斐における二例の日蓮曼荼羅授与伝説は、伝説上も現実にも存在する日蓮宗寺院の宗教者によつて、江戸時代中後期になつて作為的に生成されたと考えられる。駿河の雨乞い曼荼羅伝説も、同様に十八世紀後半の生成と既に推察した。この時代は身延山を中心に日蓮宗寺院が増加し、日蓮宗の教勢が拡大される時期である。そのなかで、宗教者が信仰を広げる方法として画策したのが、伝説生成ではなかろうか。信仰という基盤が同時になければ、高僧を高僧として受け止められる伝説は成立し得ないだろう。日蓮から曼荼羅を授与されるというモチーフは、まさに信仰の教化と受容の場面の象徴として伝承される側面があつたのではないかと考えられる。

- (1) 日蓮の法灯は様々に分派して受け継がれ、現在の日蓮宗は身延山久遠寺を總本山とする宗派に限られる。江戸時代には法華宗という方が一般的だが、本稿では便宜上特に断らない限り、過去も現在も日蓮を宗祖とする宗教全体の総称として日蓮宗を用いる。
- (2) 北村敏「伝説にみる日蓮像」「日蓮宗の諸問題」雄山閣一九七五、同「日蓮・日親伝説と民俗信仰」「仏教民俗学大系8 俗信と仏教」名著出版一九九二
- (3) 宮田登「解説」「東国」からの発想」「日本伝説大系第五卷」みづうみ書房 一九八六
- (4) 「松亭身延紀行」(万延元年)『甲斐叢書第二卷』所収
甲斐叢書刊行会 一九三四
- (5) 中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』吉川弘文館 一九九九
- (6) 冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』平楽寺書店 一九八三
- (7) 日澄著・近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従仮名草子編15日蓮聖人註画讚』勉誠社 一九七三、日朝著『元祖化導記』と日性著『元祖蓮公薩埵略伝』は後掲(9)に所収
- (8) 日潮著・日蓮宗全書出版会編『本化別頭仏祖統記』(出版は寛政九年)須原屋書店 一九一〇
- (9) 健立・玄得著『本化高祖年譜』(弘化四年版)『日蓮上人伝記集』所収 本滿寺 一九七四(天明元年版は現存せず)
- (10) 中村経年著『日蓮上人一代図会』『高僧伝集』所収 国民文庫刊行会 一九一三、小川泰堂著・日宗社編集局編『日蓮大士真実伝』隆文館株式会社 一九二一
- (11) 佐藤八郎校訂『大日本地誌大系 甲斐国志』第一～五巻 雄山閣 一九九八
- (12) 足立鉄太郎校訂『駿河記 下巻』加藤弘造 一九三三
- (13) 「甲斐国志編さんの次第」『大日本地誌大系44 甲斐国志 第一巻』雄山閣 一九九八
- (14) 斎藤典男「寺院編解説 日蓮宗」「甲斐国社記寺記 第四巻」山梨県立図書館 一九六九
- (15) 拙稿「雨乞い曼陀羅伝説を語る社会」「平成八年度富士市立博物館館報(調査研究報告)」富士市立博物館 第一九九七
- (16) 山梨県立図書館編『甲斐国社記寺記 第四巻』五〇三、五貢所載 山梨県立図書館 一九六九
- (17) 二十八紙曼荼羅の詳細は、「山中喜八著作選集I 日蓮聖人真蹟の世界 上」(雄山閣 一九九二)参照
- (18) 「妙法寺記」『新編信濃史料叢書 第八巻』所収 信濃史料刊行会 一九七四(内容は最も一般的な『続群書類従第三〇集版に依拠。ただ群書版では「御本尊」が「御本番」と記されている。)
- (19) 「当家門流継図之事」『日蓮宗宗学全書 第十八巻 史伝 旧記部(一)』山喜房仏書林 一九六八

(20) 沼津市史編集委員会民俗部会編『沼津市史編さん調査報告書第六集 岡宮の民俗』沼津市教育委員会 一九九四、筆者も調査で確認。

(21) 前掲 (8) 本書での日蓮の小立來訪は文永六年富士登山のこととされ、曼荼羅の年月日とは矛盾が生じる。現在この点は富士登山後に授与された曼荼羅が焼失したため弘安元年に再び授与された、と説明されている。日蓮富士登山伝説については別稿としたい。

(22) 渡辺藤太夫家文書（ただし現在所在不明。筆者も写真で閲覧）

(23) 佐藤八郎校訂『大日本地誌大系45 甲斐国志 第二卷』雄山閣一九九八

(24) 慶応四年「由来書」前掲 (16) 五〇五〇六頁所載

(25) 寺院本末帳研究会編『江戸幕府寺院本末帳集成 上』所

収 雄山閣 一九八一

(26) 寺院本末帳研究会編『江戸幕府寺院本末帳集成 中』所

収 雄山閣 一九八一

(27) 鼻曲がり石・柳・法華堂は妙法寺の所有地であり、慶応四年の「妙法寺由緒記」の主張では寛文九年（一六六九）の検地でそのため除地にされているという。除地の由来を確かめうる史料はなく、柳のモチーフが文字化されるのはこの時まで見あたらない。

(28) この梗概茶羅伝説は以下に詳しく、筆者も参照した。富

士吉田市史編さん室編『市史民俗調査報告書第五集 上暮地の民俗－富士吉田市上暮地－』富士吉田市 一九八六
本稿は、平成十五年度科学的研究費補助金（奨励研究）の活用成果である。

（おぎの・ゆうこ／奈良教育大学非常勤講師）